

学習支援連携委員会の動きと学習支援活動の展開

1 2014年度を振り返って

2014年度の学習支援活動支援開催数は313回、参加者数は延べ1万3千人超となり、前年度に引き続き充実した学習支援を行った。

下表に含まれる支援以外にも、セルフツアー（通年開催）、新入生歓迎イベントLibrary Week（4月、10月開催）、ビブリオバトル（6月、11月開催）などのイベントを開催した。戸山図書館でも、間接的な学習支援の試みとして、多読本の特別展示、データベースの紹介展示を開催した。

春と秋には図書館主催の講習会である図書館ワークショップシリーズを実施した。詳細は後述するが、ライティング・センターとの協同ワークショップを開催するなど、学内連携の点でも進展があった。

学生ボランティアの活動サポートにも取り組み、活動の発展と基盤の整備につとめた。学生主導のイベントが増え、特に10月に開催された脱出ゲームは600人を超える参加者を集めて、内外からの反響が大きかった。

こうした活動の様子をウェブサイトやSNSなどを通じて積極的に発信することで、図書館での学習支援活動の認知度も高まってきている。2014年度は、前年度の新しい試みが定着し、加えて学内連携と学生ボランティア活動に進展のあった年と言える。

2 2014年度授業支援について

学習支援活動全体の開催数313回のうち、学部・研究科単位および個別の授業・ゼミ単位での授業支援は214回で、前年度を上回る開催数となった。これらは開催数全体の68%を占め、学習支援活動の中心になっている。受講者数でみると、2014年度には、延べ6,408

人の学生が授業支援を受けたことになる。

学術院別にみると、政治経済学術院では71回、文学学術院では70回開催され、群を抜いて多い。これは政治経済学部の「基礎演習」（60クラス）、文化構想学部・文学部の「必修基礎演習」（52クラス）という大規模な授業支援を含むためである。特に政治経済学部の「基礎演習」は2014年度から必修化されたため支援クラス数が増加した。また、商学学術院、理工学術院、人間科学学術院の開催数も増加した。

3 セルフツアーの活用

上述の「基礎演習」および「必修基礎演習」において、2012年度までは図書館職員引率による中央図書館ツアーを行っていたが、2013年度から、学生がスタンプを集めながら自分で館内をめぐるセルフツアー方式で図書館を知ってもらうこととしている。2014年度からは、理解を深める工夫としてスタンプに加えてクイズを課した。授業での利用のほか、個人での参加者もあり、2014年度のセルフツアー参加者は延べ2,108人におよんだ。

4 学習支援活動を支える基盤の整備

アカデミック・リエゾンと呼ばれる、学習支援活動に携わる図書館職員は、2015年5月現在で総勢28人である。セルフツアーの活用などにより、リエゾン1人あたりの支援回数は落ち着いてきており、学術院ごとの担当を中心とした体制や、情報共有の仕組みも安定してきた。その一方で、支援の幅が広がり、新たな取り組みの企画や準備の業務が増えてきている。

学習支援活動を継続していくなかで重要となるのは、より効果的な支援とするために、どのようにプログラ

2014年度学習支援活動

| | 学生等 参加者数 (人) | 図書館職員 講師数 (人) | 図書館職員 サポート員数 (人) | 開催数 (回) | 開催当たり 要員数 (人) |
|-------------------|--------------------|---------------------|------------------------|------------|---------------------|
| 学部新入生向けオリエンテーション | 5,365 | 17 | 17 | 17 | 2.0 |
| 大学院新入生向けオリエンテーション | 1,155 | 16 | 13 | 18 | 1.6 |
| 授業支援：学部・研究科単位 | 4,991 | 79 | 186 | 148 | 1.8 |
| 授業支援：個別授業・ゼミ対応 | 1,417 | 71 | 89 | 66 | 2.4 |
| 図書館主催企画など | 455 | 46 | 81 | 64 | 2.0 |
| 合計 | 13,383 | 229 | 386 | 313 | 2.0 |

ムをデザインし、改善していくかという点である。こうしたことを考えるきっかけとして、2014年度にはアカデミック・リエゾン研修として、インストラクショナル・デザインのテキストをもとに知見を共有し、今後の授業支援でどのように活かせるかを検討した。

大学のグローバル化にともなって、留学生数や英語による授業が増え、英語での支援も引き続き増加している。対応可能な職員を増やしていけるよう、アカデミック・リエゾンの英語担当を中心に、基本的なコンテンツのスク립ト作成など、体制整備に努めている。

5 図書館主催講習会の開催

図書館主催講習会として、図書館ワークショップシリーズ（以下、WS）と、データベース講習会を行った。

1) WS

2014年度は春学期と秋学期の2回行った。

春学期は、6月から7月初めの3週間にかけて、全22（中央図書館16、戸山キャンパス3、所沢キャンパス3）コマ開催し、参加者数は延べ157人に上った。中央図書館の会場は2014年春に拡張されたグループ学習室Aとし、定員を10人に拡大した。開催プログラムは2013年度秋の実施結果を参考に、人気のものに絞って開催した。プログラムとコマ数を減らしたことで、省力化が図られ、参加率が向上した。またGoogle活用のプログラムを新設し、好評を得た。戸山キャンパスでは文献管理ツールRefWorksのプログラムを開催した。所沢キャンパスでは、RefWorksを2コマ開催、さらにライティング・センターと協力し、レポートの書き方のプログラムを1コマ開催した。レポートのテーマ設定部分をライティング・センター助教・チューターが、学術情報の入手の部分を図書館職員が担当した。ライティング・センターとの協力は学内連携の試みとして画期的なものとなった。

秋学期は、11月に3週間にわたり全20（中央図書館12、戸山キャンパス6、所沢キャンパス2）コマ開催し、参加者数は延べ87人となった。このうち、英語を話す新生のために英語プログラムを6コマ開催した。中央図書館では、ライティング・センターと協力し、3号館同センターにてレポート作成のワークショップを日本語1コマ、英語1コマ開催した。このワークショップでは、春の所沢と同様、ライティング・センター助手・チューターと図書館職員が分担しあって担当した。中央開催分のうち2コマは新築なった3号館CTLT Classroomで開催、館外での開催を試行した。戸山キャンパスでは春学期と同様RefWorksのプログラムを開催した。所沢図書館においてはライティング・センターとの協力でレポート作成のワークショップを開催した。

2014年度にはWSの定期開催が定着し、参加者募集や会場設営、広報など運営面は安定してきた。また、ライティング・センターとの連携は、図書館外の学びの場における支援のあり方のテストとなった。今後もどのような形で協力し合えるかを探ってゆきたい。

2) データベース講習会

高田早苗記念研究図書館では、6月末から7月初めにかけて、大学院学生向けにデータベースセミナーを開催、法律系を中心にOECD統計、アメリカ議会資料、企業分析、アメリカ教育学文献を加えた11種のデータベースの講習会を行った。学部学生、教職員も含む60人の参加があった。

戸山図書館では、4月に、新たな取り組みとして、他大学から進学した大学院学生向けに文献収集ガイダンスを開催した。早稲田大学図書館の特徴、文献の入手法および各種データベースについて解説した。

理工学図書館では、4月に理工系データベース講習会としてWeb of Science, Scopus, SciFinderの講習会、6月には文献管理ソフトMendeleyの説明会を開催した。また、学生の申し込みに応じて開催する講習会の受付を開始した。

3) 今後に向けて

WSとデータベース講習会は、授業内での学習支援とは異なり、誰もが主体的に参加できる図書館主催講習会である。今後も、より幅広い学生への学習支援の機会として、対象者のニーズにあわせて継続開催していきたい。

6 読書推進企画の実施

1) ビブリアバトルの開催

図書館では2013年春より、Library Weekを開催し、新生をはじめとする利用者に図書館に親しんでもらう機会を提供している。その中の一つ、読書推進イベントとして企画されたのが、ビブリアバトルである。

ビブリアバトルとは、バトラー（発表者）が5分間でお気に入りの本を紹介し、バトラーと観客全員の投票によって、チャンプ本（一番読みたくなった本）を決定する書評合戦である。早稲田では2013年度が初開催となり、22人のバトラーのトーナメント形式で、開幕戦・準決勝・決勝を行い、総長賞を受賞したバトラーはビブリアバトル全国大会予選に出場した。翌2014年度は、1ゲーム完結型で6月・11月に5ゲーム開催、延べ21人のバトラーが参加し、熱いバトルを繰り広げた。チャンプ本は、紹介者のPOPとともに書店の特設コーナーにて販売されるなど、学外とも連携したイベントとなっている。



2013年ビブリオバトル決勝 表彰式の様子

2) 今後の読書推進企画

ビブリオバトルに限らず、Library Weekの中で、ブックトークやおすすめ本の展示など、学生を巻き込んだ読書推進企画の幅が広がってきている。今後も利用者の読書欲を刺激するような企画を打ち、より一層の読書推進の充実に向けて、検討・実施を続けていきたい。

(参考) 知的書評合戦ビブリオバトル公式サイト
<http://www.bibliobattle.jp/>

7

ボランティアスタッフ LIVS の活動と学生協働

1) LIVS の概要

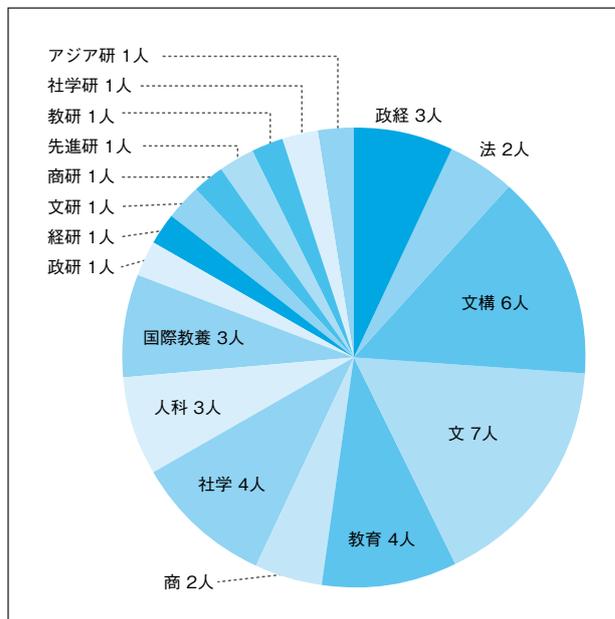
LIVSは早稲田大学図書館の公式ボランティアスタッフであり、2013年4月に発足した。活動にあたっては、以下の4項目を理念に掲げている。

- (1) 学生の視点に立った学習・研究支援サービスの提供
- (2) 身近で質問しやすい図書館サービスの実現
- (3) 学生の参画を通じた図書館サービスの改善
- (4) 学びあいを通じた
 学生ボランティアスタッフ自身の図書館利用習熟

無償のボランティアスタッフであり、自由な発想と自主的な参加、学生ボランティアだからできること、を意識して活動を行っている。逆に、ルーチンワークや定型業務などに従事することがないよう、留意している。

2) スタッフ人数と構成

2014年11月時点での学生スタッフ総数は42人であった。うち学部学生は34人、大学院学生8人である。



LIVSスタッフの所属(2014年11月時点)

3) 運営体制

運営は、月1回、学生と職員が出席する「全体ミーティング」によって協議される。ここで個別のイベントが発案され、リーダーを決め、キックオフとなる。キックオフ後は、個別イベント単位で必要に応じてミーティングを行うが、これは基本的に学生のみで実施する。いずれのミーティングも議事録を必ず残し、LIVSで共有する。また、グループウェアやメールリングリストを活用し、ミーティングを補完している。



全体ミーティングの様子

4) 2014年度の活動概要と成果

2014年度は発足2年目ということで、新規メンバーの拡大や、学生主体の活動増加、スタッフ教育体制の整備などを目指して運営した。その結果、学生主導の

自主的なイベントも増加した。特に10月に実施された「脱出ゲーム」は参加者614人を数える大規模なイベントとなり、参加した学生の学習効果も認められるものであった。また、お茶の水女子大学、東京女子大学と共に「学生協働ワークショップ in 東京 2014」を開催し、大学図書館界の横のつながりを強めるとともに、対外的知名度を向上させた。さらに図書館広報への関わりも強め、図書館公式Facebookやtwitterへの計画的な投稿によって図書館SNSの活性化を支援した。

5) 学生スタッフ研修体制

これまでもスタッフの研修は重視してきたものの、ボランティア活動ということもあって、散発的な研修にとどまり、OJTに頼る部分が多かった。2014年度にはこの点を大きく変更し、ワークショップの技法や発想法に加え、大学の学習・研究に必要な基礎的な情報リテラシー教育を体系的に実施した。図書館では学習支援に関わる有償スタッフは雇用していないものの、「学習支援に関わる学生スタッフ」を念頭に置いて計画を作成した。同時にオンデマンドコンテンツ化によって汎用性も持たせた。これらは、実際に大学総合研究センターが運営・管理するLA (Learning Assistant) の研修コンテンツの一部として流用された。次年度も引き

続き他箇所との連携を見据えつつ、研修コンテンツの見直しと体系化をより推進していく予定である。

6) 個別の企画内容

(1) 「学生読書室」に行ってみよう！～ココから始まるキミの学生生活～(4/15、16、18)

新入生になじみの浅い「学生読書室」を案内するツアー。クイズ旅番組を模し、各学読の特徴をクイズにして出題した。

(2) めざせレポートマスター！(6/26、27、30、7/2)

グループワークを通して効率的な参考文献の探し方を学ぶイベント。一方的な知識の伝達だけでなく、架空のレポート課題に対して、LIVSスタッフが参加者とともに試行錯誤をする形で学んだ。



「めざせレポートマスター！」開催の様子(蔵書目録WINEを使ったグループワーク)

2014年度LIVS活動内容一覧

| 実施時期 | 企画名称 | 概要 |
|--------------|--|--|
| 2014年4月 | 「学生読書室」に行ってみよう！(計3回) | 新入生になじみの浅い「学生読書室」を案内するツアー。 |
| 2014年6月～7月末 | めざせレポートマスター！(計4回) | 架空のレポート課題をもとに文献を探すワークショップ。蔵書目録WINE操作、書架での資料内容の判断、参考文献作成など。 |
| 2014年6月末～7月末 | 書籍展示・ブックリスト「明治期以降の日本の子どもたちが目にしてきた作品たち」 | 7月5日に開催された早稲田大学教育・総合科学学術院教育会主催シンポジウム「ドラえもんから子どもたちを考える～「子ども」と「大人」とは何だろう」と連動し、「明治期以降の日本の子どもたちが目にしてきた作品たち」をテーマに、資料展示と、おすすめ書籍のブックリストを作成。 |
| 2014年9月 | 学生協働ワークショップ in 東京 2014 | 本学を含む3大学が主催し、東京近県の8大学図書館の学生団体が参集、取組発表と共有を行った。 |
| 2014年10月 | 脱出ゲーム in 中央図書館 | 中央図書館を舞台に、近年流行っている謎解きイベント「脱出ゲーム」を開催した。参加者600人超を数える大盛況となるとともに、図書館教育の面からも明確な成果を示した。 |
| 2014年11月 | 図書館総合展見学 | LIVS同、学生が図書館に関わっている帝京大学「共読ライブラリー」などを見学。 |
| 2015年2月 | 理工学図書館新入生ガイダンスビデオ作成 | 4月の理工学図書館の新入生ガイダンスで使用するビデオを作成した。 |
| 2015年3月 | 成蹊大学図書館訪問、武蔵野市立中央図書館・武蔵野プレイス見学 | 成蹊大学を訪問し、図書館見学後にお話を伺った。その後武蔵野市の公共図書館2館を訪問し、様々な図書館の役割と新しい図書館建築の実際を学んだ。 |
| 通年 | ブログ「りぶろぐ！」運営 | 学生による図書館案内ブログ「りぶろぐ！」運営。 |
| 通年 | 図書館公式SNSへの投稿 | 図書館公式SNSであるFacebookとtwitterへのLIVSからの投稿。 |

(3) 書籍展示・ブックリスト「明治期以降の日本の子どもたちが目にしてきた作品たち」(6月末～7月末)

7月5日に開催された早稲田大学教育・総合科学学術院教育会主催シンポジウムと連動し、「明治期以降の日本の子どもたちが目にしてきた作品たち」をテーマに、資料展示とブックリスト作成を行った。

(4) 学生協働ワークショップ in 東京2014(9/11)

お茶の水女子大学図書館、東京女子大学図書館、早稲田大学図書館の3者が発起人となり、大学図書館における学生協働の活性化を企図して企画。東京近県8大学図書館の学生団体が参集、取組発表と共有を行った。

(5) 脱出ゲーム in 中央図書館(10/20～24)

中央図書館を舞台に、近年流行っている謎解きイベント「脱出ゲーム」を開催した。参加者は設定されたストーリーに対して出題される問題を、中央図書館の施設、資料、蔵書目録WINEなどのツールを使って解いていく。参加者600人超を数える大盛況となるとともに、図書館教育の面からも明確な成果を示し、さらには図書館SNSの活性化といった効果をもたらした。(詳細は『ふみくら』87号の報告「大学図書館における「脱出ゲーム」とゲーミフィケーションの可能性」参照)



「脱出ゲーム」開催の様子(書架探索)

(6) 図書館総合展見学(11/7)

11月2日から8日に開催された「図書館総合展」を見学した。会場では、LIVS同様学生が図書館に関わっている帝京大学「共読ライブラリー」などを見学した。

(7) 理工学図書館新入生ガイダンスビデオ作成(2月)

2015年4月4日の理工3学部の新入生ガイダンスで上映するビデオ「WASEDA BEARの1日 in 理工学読」を作成した。

(8) 成蹊大学図書館訪問、

武蔵野市立中央図書館・武蔵野プレイス見学(3/9)

成蹊大学を訪問し、図書館見学後にお話を伺った。その後武蔵野市の公共図書館2館を訪問し、様々な図書館の役割と新しい図書館建築の実際を学んだ。

8 学内連携の進展

学習支援活動をより効果的に展開するにあたっては、学内他部署との連携が欠かせない。2014年度も授業支援における各学術院で展開される教育研究活動との連携はもちろん、さまざまな活動で学内連携を進展させた。

1) 他部署との連携企画

2013年度までのキャリアセンターとの連携企画に続き、2014年度は学生に対し学びと研究に関する支援を行う機関として、ライティング・センターと図書館との連携を模索した。まず春学期には所沢図書館、秋学期には中央図書館においても、ライティング支援と学術情報検索の支援を同時に行う協同ワークショップを実現させた。

2) 人事研修での連携

人事課との共催による研修も引き続き実施した。4月、10月には新入職員を対象とした「職員のための学術情報検索法」を実施、12月には専任職員のうち希望者を対象とした新聞記事と新聞データベースの活用に関する「図書館情報検索研修」を開催した。

3) 広報に関する連携・協力

広報面では、広報課、学生生活課などで発行する学内のさまざまな媒体で学習支援活動を取り上げてもらうとともに、それぞれの企画に対して協力をを行った。国際コミュニティセンターとは、職員連絡会に図書館も参加し、双方のイベントを互いに広報するなどの連携を行うだけでなく、今後のさらなる連携を検討した。

4) 動画コンテンツの制作・公開

2013年度に引き続き、大学総合研究センター(旧遠隔教育センター)と連携し、図書館ガイド&チュートリアルビデオの制作・公開、Library Weekをはじめとした図書館のイベント映像の公開、LIVS向け図書館研修コンテンツの制作を行った。LIVS向けコンテンツは、大学総合研究センターが運営・管理するLA(Learning Assistant)に対する研修用コンテンツとしても提供を行った。また、グローバルエデュケーションセンターには「わせだライフABC」へのコンテンツ提供を継続して行った。

5) Waseda Vision 150 に関するプロジェクトへの参画

大学が掲げる中長期計画 Waseda Vision 150 に基づき、学内では多数の箇所横断的なプロジェクトが進

行している。LIVSを組織・運営する立場から「学生参画の仕組み創設PJ」、ラーニング・コモンズをはじめ学内の新たな教育支援の場の創出に関わる立場から「教育支援システムの構築PJ」など、図書館としても一部のプロジェクトに参画している。

9 学習支援連携委員会の動き

2014年度は、学習支援連携委員会を2回開催した。各回の主な内容を以下にまとめる。

1) 学習支援連携委員会 (第15回)

7月31日に開催された学習支援連携委員会(第15回)では、冒頭で学習支援連携委員会設置要綱の改訂について図書館から提案があり、承認された。改訂の内容は以下のとおりである。

- (1) 第1条(設置)にWaseda Vision 150の革新戦略との関連を記載
- (2) 第3条(構成)でグローバルエデュケーションセンター設置に伴う組織名の変更
- (3) 第3条(構成)に図書館利用者支援課長を追加

続いて図書館から2014年度春学期の学習支援活動の報告があり、図書館主催イベントについては、スライド画像を上映しながら開催報告が行われた。

最後に図書館から今後の活動として、秋学期もLibrary Week、新入生ガイダンスでの図書館案内、ワークショップ、授業支援が予定されているとの報告があった。

2) 学習支援連携委員会 (第16回)

2月3日に開催された学習支援連携委員会(第16回)では、議事に先立ち、図書館長から本委員会の趣旨や構成の説明があり、図書館が学術院と直接的な接点を持つ場として積極的に活用していきたい旨、説明があった。

続いて、図書館から2014年度の学習支援活動の報告と、2015年度の活動計画の説明があった。2015年度の重点項目として以下の3点が確認された。

- (1) **多様な学習支援活動の展開**：学生の主体的な学びを支援するため、多様な活動を展開する
- (2) **授業支援の充実・改善**：学術院や担当教員と連携して、授業支援の充実と改善をすすめる
- (3) **学習支援活動の広報と学内連携の強化**：図書館での学習支援活動をわかりやすく広報し、学内での連携を多面的に広げていく

さらに、2015年度春学期に開催するLibrary Weekの開催案が図書館から示された。

最後に、図書館長から「新しい図書館機能を目指して」と題して、図書館が今後展開すべき機能について提案があった。Waseda Vision 150の革新戦略にある「対話型、問題発見・解決型教育への移行」に対応した新しい学修環境整備の一つとして、特に学修空間についての提案が示され、意見交換を行った。

10 2015年度に向けて

2015年度は、以下の視点を中心に、学習支援活動をすすめていく。

1) 多様な学習支援活動の展開

昨年度に引き続き、学生の主体的な学びを支援するため、授業内での支援に限らず、新入生歓迎イベントや講習会など図書館主催の企画を通じて、多様な学習支援活動を展開する。また「早稲田大学図書館ボランティアスタッフLIVS」の活動を継続し、学生の視点を取り入れた図書館利用支援・学習支援を行う。新たな試みとしては、学内に設置されるラーニング・コモンズなど、図書館外の学びの場における支援のあり方を模索する。

2) 授業支援の充実・改善

授業内での支援は、開催数で見ると図書館で実施している学習支援活動全体の7割を占め、中心的な活動となっている。引き続き、学術院や担当教員との連携のもと、新たなコンテンツやプログラムの提案や、支援を担当する図書館職員の業務基盤整備を通じて、授業支援の充実と改善をすすめる。

3) 学習支援活動の広報と学内連携の強化

ここ数年、イベントなどの広報や情報発信に力を入れてきたこともあり、図書館での学習支援活動に対する学内での認知度は少しずつ高まっている。図書館の活動が学内外の媒体で紹介される機会も増えた。

それにともなって学内他部署との連携も進んでいる。授業支援では、毎年継続して開催するものが増えているが、特に学部・研究科単位で行う大規模の支援では、教員との連携はもとより、学術院事務所の職員との連携も重要になってきている。授業支援以外でも、他部署との連携企画や学内プロジェクトへの参画など、連携の幅も広がってきている。

今後も図書館の学習支援活動をわかりやすく広報するとともに、学内での連携を多面的に進めていきたい。

学習支援連携委員会設置要綱

(設置)

第1条 Waseda Vision 150 核心戦略の一つである「対話型、問題発見・解決型教育への移行」の確立に向けて、図書館に期待される新たな役割の具現化および各学院が展開する教育研究活動と図書館サービスのより密接な連携を実現するため、図書館に学習支援連携委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(任務)

第2条 委員会は、主に学部学生に対する学習支援の一層の充実および強化を目指し、全学共通の枠組みの構築および各学院ごとの取り組み等について検討を行う。

(構成)

第3条 委員会の委員は、次に掲げる者とする。

- 一 各学院において、教務担当教務主任、教務担当副主任または学術院長が推薦する者のうちから選任された者 各1人
- 二 図書館長が指名する教職員 若干人
- 三 教務部長または教務部副部長のうちいずれか1人
- 四 グローバルエデュケーションセンターの所長または教務主任のうちいずれか1人
- 五 図書館長、図書館副館長、図書館事務部長および図書館利用者支援課長

(任期)

第4条 委員の任期は、前条第5号に規定する委員を除き、図書館長の任期に従う。

(作業部会)

第5条 委員会は、必要に応じて作業部会を置くことができる。

(事務)

第6条 委員会の事務は、図書館総務課が行う。

附則 この要綱は、2009年2月6日から施行する。

附則 この要綱は、2014年9月3日から施行し、2014年4月1日から適用する。

所管：教務課長

学習支援連携委員会委員名簿

| | 所属箇所 | 委員 |
|----|-------------------|--|
| 1号 | 政治経済学術院 | 清水 和巳 (～2014.9.20) 岡本 暁子 (2014.9.21～) |
| | 法学学術院 | ストックウェル グレン (～2014.9.20) 土谷 彰男 (2014.9.21～) |
| | 文学学術院 | 井上 文則 (～2014.9.20) 田辺 俊介 (2014.9.21～) |
| | 教育・総合科学学術院 | 太田 亨 (～2014.9.20) 久野 正和 (2014.9.21～) |
| | 商学学術院 | 矢後 和彦 (～2014.9.20) 小倉 一哉 (2014.9.21～) |
| | 理工学術院 | 宗田 孝之 (～2014.9.20) 戸川 望 (2014.9.21～) |
| | 社会科学総合学術院 | 厚見 恵一郎 (～2014.9.20) 北村 能寛 (2014.9.21～) |
| | 人間科学学術院 | 佐藤 将之 (～2014.9.20) 百瀬 桂子 (2014.9.21～) |
| | スポーツ科学学術院 | 赤間 高雄 |
| | 国際学術院 | ドゥテ シルヴァン マチュウ ジュリアン |
| 3号 | 教務部 | 大野 高裕 (～2014.9.20) 古谷 修一 (2014.9.21～) |
| 4号 | グローバルエデュケーションセンター | 澤田 敬司 (～2014.9.20) 藤田 誠 (2014.9.21～) |
| 5号 | 図書館 | 飯島 昇藏 (～2014.9.20) 深澤 良彰 (2014.9.21～) |
| | 図書館 | ローリー ゲイ |
| | 図書館 | 中島 達夫 (～2014.9.20) |
| | 図書館 | 多田 智子 |
| | 図書館 | 湯川 亜矢 |